

教師の教職観に関する研究

岩井らは、教師の教職観に関する研究について発表した。これに対し、古畑（国際キリスト教大）は質問紙作成法について質疑し、ここで用いられた方法では、客観的結果が得られなくて、性差、年齢差などを不当に強調した discrimination scale ができるのではないかと指摘した。また、このようにして得られた尺度を Interval Scale として用いる点に疑義が残ることも指摘した。発表者らは、この質問紙作成に当って、意図的に弁別力だけを強めるようには心掛けなかつたとの答弁があつた。むしろ、本研究は、validity をより高めるための今後の研究の基礎を作るものであるとの答弁があつた。その後、今後の方法についての討議がなされ、2つの方向が得られた。すなわち、1) この結果を集団面接に持ち帰り、「この結果をどう思いますか」という質問を出し、このような feed back を通して、validity を測定すること、2) 他の職場と教職の場とでどう違うかを検討すること、とであつた。

教師の発言の指示性について

竹下は、教師の発言の指示性について発表した。ここでは、教師及び児童の発言の型と内容のカテゴリーによる分析が行なわれたものであつた。これに対し、古畑（国際キリスト教大）は、この種の研究においては、主題の特性、クラスの構造、教師の性格的特性、発言回数などを独立変数に組入れるべきだと指摘した。また、村瀬（名古屋大）は、教科の違いで教師の指示性は異るであろうと指摘した。これに対し、発表者は、これらの要因は大いに影響するものと思われるが、この研究では、時間、経費等の外的条件によつて、その一具体例にだけに止つたが、今後は指摘された方向に研究を進めたいとの答弁があつた。

以上のように、本部会参加者すべてによる熱心な質疑と討議を通して、特に研究法とその妥当性の問題に討議の焦点が向けられた。このようにして、教師と生徒児童との人間関係の問題に対するより妥当な研究法を見出そうと努めたことは大きな成果であつたと云えよう。

（原岡一馬）

20. 教育環境・社会 (4)

417-422 大学生とその生活環境に関する 社会心理学的研究 (1)

- ①三隅二不二・②安藤延男
③狩野 素朗・④浜田哲郎
⑤佐々木 薫・⑥佐藤信茂(九州大学)
篠原 しのぶ(梅光女学院短期大学)

① 研究計画

以下6つの研究発表は、学生の態度・行動に関する総合研究の一部である。大学進学者数の激増により、学生生活は国民の人間形成の重要な要因となりつつあるが、一方それに関する客観的・行動科学的研究は十分な組織化をみていない。われわれは、かかる上位目的に志向しつつ、まず実証的研究に着手した。

② 大学生の人生観の分析

Morris (1956) の尺度 (13種類の“生き方”) を九大新入生全員 (1964年) に実施、原著の結果と比較した。日本学生が最も好しいとする選択率では、第3の「生き方」で減少、第7で増大が著しい。また、因子C (隠遁と自足) で著しい減少、因子E (感覚的享樂) で

若干の増大が見られた。即ち米国型への接近を示している。

③ 大学生の価値観の分析

九大新入学生の価値観を、力、真、善、愛、美の5つの価値指向の観点から分析した。結果によると全入学者については真に対し強い価値をもつもの (真型) が多く善型は少なかつた。学部別には法、経済学部は力型、医、理、工、薬学部は真型、文学部は美型がそれぞれ顕著に多かつた。また、善、力型のは権威主義的態度が強く、美型は弱いようである。

④ 学生々活と態度変容 (i)

F スケール (権威主義的人格尺度) を測度として、4年間の大学生生活が学生の態度変容に及ぼす効果を測定した。その結果、F 得点の顕著な低下によつて、より非権威主義化の方向への態度変容が検証された。変容を促した媒介変数として、学習活動、課外その他の活動への参加度、有意義さの認知、教官との接触頻度が見出された。

⑤ 学生々活と態度変容 (ii)

④に引き続き、非権威主義的方向への態度変容に寄与する要因を分析する。課外活動、とくに研究会的な文化サークルへの参加経験、学寮生活の経験が有意な要因であるとみとめられた。また、教養課程から専門課程への移行に伴う家族集団からの脱却と教室研究室グループへの準拠の増大が、非権威化への変化と相関していた。

⑥ 学寮生活の研究

学寮が大学生の生活環境としていかなる教育的効果をもつものであるかを明かにするための調査を行った。その結果、教育的効果の1つとして、非権威主義的(民主的)方向への社会的態度の変容が認められ、この効果は主として寮内に起居を共にすることから必然的に生じる informal な人間関係に起因するものであると考えられる。

討 論 の 概 要

部会の特徴

この部会では「大学生とその生活環境に関する社会心理学的研究」と題する九州大学の三隅らの共同研究6つが発表された。

討議時間は30分。短時間ではあるが、大学生生活の社会心理学的研究という1つのテーマに関して活発な討議が展開された。

討議の内容は以下3つの問題に分けることができよう。

討議の内容

第一の問題は、三隅らの研究で用いられた3つの調査尺度、すなわち Morris の価値尺度(13の way to live)、Allport-Vernon 式価値尺度: 南条改訂、権威主義態度尺度(F スケール): 藤沢、浜田版の妥当性・信頼性その他についての問題である。安藤(九大)は Morris が U.S. のデータから抽出した価値(13の way to live)に関する5つの因子について補足をおこなった。すなわち、A. 社会的拘束と克己、B. 活動の中での喜びと進歩、C. 隠遁と自足、D. 受容性と思いやり、E. 放逸ないし感覚的享楽。

これに対して藤原(東京学芸大)から、わが国における因子分析の資料はないのかとの質問が出された。安藤は ICU での結果による因子分析が藤原ら(ICU)によつてなされており、また九大でも、本研究のデータから、約400名ほど抽出し、因子を抽出している旨の報告があつた。

Allport-Vernon 式価値尺度: 南条改訂に関しては、それが、オルポート、バーノン、リンゼイ版によるのか、あるいはオルポート・バーノン原版によるのかとの質問が佐藤(京大)から出された。狩野(九大)は、その点の区別については、南条の論文にはふれられていないようであるとの回答があつた。また、南条改訂の Allport-Vernon 式価値尺度は原版をそのまま日本式に翻案したものではなく、価値観そのものも日本人向けに改訂したものであるため、もし国際的比較をおこなおうとする場合には、直接そのままの形では不可能であろうという1つの問題点が佐藤(京大)、狩野によつて提出された。

F スケールに関しては、信頼度係数、スタビリティー等に関する藤原の質問に対し、浜田(九大)は、スタビリティーに関しては出していないが、信頼度係数は0.79(スプリット・ハーフ法)であることを明らかにした。

第二の問題は、研究の内容に関するものである。佐藤(九大)が発表した、学寮生活の研究に関して、特に、学寮内における人間関係はどうか(丸井(名古屋大))また凝集度の問題点に関して活発な討議がなされた。

安藤は、佐藤(九大)が、学寮の経験即ち、F 得点の下降(非権威主義的方向への態度変容)と結びつくといわれたように思うが、むしろ学寮のもつ社会的規範(social norm)の質を媒介変数として考えに入れるのであればならないのではないか。Siegel, A, E らの研究ではむしろ、ある種の学寮の居住者だけは、F 得点の下降が阻害されたと報告している。だから九州大学学寮居住者の規範や価値観の方向性または特性について触れる必要があるのではないかと疑問が出された。以上の点に関し、佐藤(九大)は学寮の凝集度と F 得点の変化との間に有意な関係はなかつた。そして寮内における交友範囲が広いの方が F 得点の下降が著しい。逆に凝集度の高い学寮の学生達は、学生運動や、寮に関する学生部との交渉等においてより活発であつた。

また、寮生の中で正課の活動に最も意義を感じている者の方が F 得点下降変化をより多く示している。結局 F 得点の下降は学寮におけるインフォーマルな交友関係に強く影響されているのではないかと考えられる。なお、九大の場合、全体的にいつて非権威主義的であるといつていいのではないかと思うとの回答があつた。また、この研究で、凝集度を測定したソシオメトリーの基準が、親友ということに限られているが、選択(行動)